

3.19

第580回 サントリーホール名曲シリーズ
〈木〉サントリーホール／19時開演

The 580th Suntory Hall Popular Series
Thursday, 19th March, 19:00 / Suntory Hall

3.21

第175回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈土・祝〉東京芸術劇場／14時開演

The 175th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 21st March, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ジェラルール・コルステン [4ページ](#)
Conductor GÉRARD KORSTEN

ソプラノ エヴァ・メイ [5ページ](#)
Soprano EVA MEI

コンサートマスター 長原幸太
Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト 交響曲 第38番 ニ長調 K.504 〈プラハ〉 [約26分] [6ページ](#)
MOZART / Symphony No. 38 in D major, K. 504 "Prague"
I. Adagio – Allegro II. Andante III. Presto

モーツァルト 演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉 K.369 [約8分] [7ページ](#)
MOZART / Concert Aria K. 369 "Misera, dove son?"

モーツァルト 演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉 K.528 [約9分]
MOZART / Concert Aria K. 528 "Bella mia fiamma, addio"

[休憩 Intermission]

モーツァルト 歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲 [約5分]
MOZART / "La Clemenza di Tito" Overture

モーツァルト 歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿” [約7分]
MOZART / "La Clemenza di Tito", "Non più di fiori"

モーツァルト 歌劇〈イドメネオ〉から“オ레스テとアイアスの苦しみを” [約5分]
MOZART / "Idomeneo", "D'Oreste, d'Ajace"

モーツァルト 交響曲 第35番 ニ長調 K.385 〈ハフナー〉 [約18分]
MOZART / Symphony No. 35 in D major, K. 385 "Haffner"
I. Allegro con spirito II. Andante III. Menuetto IV. Presto

※一部曲目およびコンサートマスターが当初予定より変更されました。

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社 (3/19)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[事業提携] 東京芸術劇場 (3/21)

3.27

第546回 定期演奏会
〈金〉サントリーホール／19時開演

The 546th Subscription Concert
Friday, 27th March, 19:00 / Suntory Hall

指揮 ジェラルール・コルステン [4ページ](#)
Conductor GÉRARD KORSTEN

コンサートマスター 長原幸太
Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト 歌劇〈劇場支配人〉序曲 [約5分] [12ページ](#)
MOZART / "Der Schauspieldirektor" Overture

モーツァルト 交響曲 第41番 ハ長調 K.551 〈ジュピター〉 [約31分] [13ページ](#)
MOZART / Symphony No. 41 in C major, K. 551 "Jupiter"
I. Allegro Vivace
II. Andante Cantabile
III. Menuetto (Allegretto)
IV. Molto Allegro

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 交響詩〈英雄の生涯〉 作品40 [約45分] [14ページ](#)
R. STRAUSS / Ein Heldenleben, op. 40
I. Der Held – II. Des Helden Widersacher – III. Des Helden Gefährtin –
IV. Des Helden Walstatt – V. Des Helden Friedenswerke –
VI. Des Helden Weltflucht und Vollendung der Wissenschaft

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

読響とともに大震災を経験
4年越しの思いを実現へ

ジェラルド・ コルステン

Gérard Korsten

- ◇ 3月19日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇ 3月21日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
- ◇ 3月27日 定期演奏会



©Marco Borggreve

1960年南アフリカ・プレトリア生まれ。ザルツブルクで名匠シャンドル・ヴェーグにヴァイオリンを師事し、カメラータ・ザルツブルクのコンサートマスターとしてキャリアを歩み始めた。87年にはヨーロッパ室内管に転じ、指揮活動を本格化させる96年までコンサートマスターを務めた。その後はプレトリア国立劇場、ウブサラ室内管の各首席指揮者、テアトロ・リリコ・ディ・カリヤリ、ロンドン・モーツァルト・プレイヤーズの各音楽監督を歴任、現在はオーストリアのフォアアールベルク響で首席指揮者を務めている。

客演指揮者としてはベルリン・ドイツ・オペラ、ミラノ・スカラ座、パルマ・テアトロ・レージョ、トリエステ・ジュゼッペ・ヴェルディ歌劇場、ハンガリー国立歌劇場、リヨン歌劇場、スウェーデン王立歌劇場といった欧州の主要歌劇場や、ブタペスト祝祭管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ザルツブルク・モーツァルテウム管、RAI国立響（イタリア国立放送響）、スウェーデン放送響、メルボルン響などの著名なオーケストラに登場している。

レコーディング活動としては、ヨーロッパ室内管と録音したチャイコフスキー〈弦楽セレナード〉と〈フィレンツェの思い出〉をドイツ・グラモフォンからリリースしているほか、〈エジプトのヘレナ〉〈オイリアンテ〉〈アルフォンソとエストレッラ〉〈ドン・ジョヴァンニ〉〈フィガロの結婚〉など、オペラのCDやDVDも好評を博している。

読響とは2008年に初共演。2度目の共演となった11年3月の来日中、東日本大震災に遭遇。混乱が続く中、公演前日までリハーサルを進めたものの、3月14日の《定期演奏会》は当日の朝にキャンセルを余儀なくされた。今回の来日では、その公演で披露されるはずであったプログラムを、4年越しで実現する。

類い稀^{まれ}なる歌声とステージ・プレゼンス
世界を魅了するプリマ・ドンナ

エヴァ・メイ

Soprano
Eva Mei



イタリア・ファブリアーノ生まれ。1990年に〈後宮からの誘拐〉コンスタンツェ役でウィーン国立歌劇場にデビューし、大成功を収めた。その後はミラノ、フィレンツェ、ローマ、ベルリン、ロンドン、チューリヒ、ザルツブルクなどの主要歌劇場に次々と招かれ、得意のコロラトゥーラでロッシーニ、モーツァルト、ベッリーニ、ヴェルディを中心に演じ、イタリアを代表するソプラノ歌手として世界中で高く評価されている。日本でも藤原歌劇団公演やローマ歌劇場、チューリヒ歌劇場の来日公演、各地でのコンサートなどで幅広く活躍しており、知性あふ^{あふ}れる歌唱とチャーミングなステージで多くのファンを獲得している。

読響とは2011年3月に初共演。ヴェルディやドニゼッティなどのオペラ・アリアを披露し、聴衆を熱狂の渦に巻き込んだ。

-
- ◇ 3月19日 サントリーホール名曲シリーズ
 - ◇ 3月21日 東京芸術劇場マチネーシリーズ
-

プログラムノーツ
PROGRAM NOTES

飯尾洋一
いいお よういち・音楽ライター

第580回
サントリーホール名曲シリーズ
3.19 〈木〉

第175回
東京芸術劇場マチネシリーズ
3.21 〈土〉

モーツァルト

交響曲 第38番 ニ長調 K. 504 〈プラハ〉

作曲：1786年／初演：1787年、プラハ／演奏時間：約26分

「ここでは話題といえばフィガロばかり。ほかのオペラなんかには目もくれず、明けても暮れてもフィガロ、フィガロ」（友人への手紙）

1787年1月、プラハの街ではウィーンを上回るモーツァルト旋風が巻き起こっていた。前年のオペラ〈フィガロの結婚〉の大成功を受けて、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）はプラハへと向かった。

プラハ旅行では〈フィガロの結婚〉の上演に加えて、モーツァルトの公開演奏会が開かれた。交響曲第38番〈プラハ〉はこの演奏会で披露されたものと考えられている。モーツァルトはプラハの熱狂的な聴衆に歓待され、さらに新作オペラの依頼を受けて、これが同年秋の〈ドン・ジョヴァンニ〉上演に結実する。

わきあがるモーツァルト・ブームを反

映するかのように、〈プラハ〉交響曲は従来よりも一段と充実した書法で書かれ、緊密な構成感と〈フィガロの結婚〉を思わせるような快活さを併せ持っている。

曲はメヌエット楽章を欠いた三つの楽章から構成される。

第1楽章 アダージョ～アレグロ 入念な序奏が劇的効果を生み出し、明るく生氣にあふれた主部と鮮やかなコントラストを作る。

第2楽章 アンダンテ 陰影に富んだ繊細な表情はモーツァルトならではの。淡く哀愁をにじませる。

第3楽章 プレスト 躍動感あふれる活発な主題が、ドラマティックな高揚感を生み出し、輝かしく壮麗なフィナーレを迎える。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

モーツァルト

演奏会用アリア K. 369 〈あわれ、ここはいずこ〉

作曲：1781年／初演：おそらく1781年、ミュンヘン／演奏時間：約8分

演奏会用アリア K. 528 〈うるわしい恋人よ、さようなら〉

作曲：1787年／初演：おそらく1787年、プラハ／演奏時間：約9分

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲

作曲：1791年／初演：1791年、プラハ／演奏時間：約5分

歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”

作曲：1791年／初演：1791年、プラハ／演奏時間：約7分

歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみを”

作曲：1780～81年／初演：1781年、ミュンヘン／演奏時間：約5分

交響曲 第35番 ニ長調 K. 385 〈ハフナー〉

作曲：1782年、1783年改訂／初演：1783年、ウィーン（改訂稿）／演奏時間：約18分

モーツァルトは特定の歌手を念頭においた演奏会用アリアを折に触れて作曲している。**演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉K. 369**もそのひとつ。ミュンヘンでオペラ〈イドメネオ〉初演を大成功させてまもない頃、アマチュア歌手であったパウムガルテン伯爵夫人ヨゼーファのために作曲された。モーツァルトがウィーンに移り住む前に書かれた最後の作品でもある。

歌詞はメタスタジオ作のオペラ台本「エツィオ」からとられる。ローマの將軍エツィオは不実な友マッシモの娘フルヴィアと愛を誓っていたが、マッシモの

かんけい 奸計により投獄される。フルヴィアは婚約者と父親の間で引き裂かれる思いを歌う。アンダンテのシェーナ（劇唱）にアリアが続き、アリアの後半では決然としたアレグロに転ずる。

演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉K. 528は、1787年、プラハでの歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉初演直後に作曲された。プラハ滞在中のモーツァルトは、旧知の作曲家であるドゥーシェクの別荘に招かれ、歌手であるドゥーシェク夫人のためにこのアリアを書いた。〈ドン・ジョヴァンニ〉の余波を感じさせるようなドラマティックな曲想は、

ドゥーシェク夫人の歌手としての力量の高さをうかがわせる。

歌詞はヨンメッリのオペラ〈なだめられたチェレーレ(ケレス)〉よりとられた。恋人からひきはなされ、死を宣告された主人公ティターノの苦悶^{くもん}が歌われる。悲痛なレチタティーヴォから、情熱的なアリアへと続く。

1791年12月、モーツァルトは35歳で早すぎる最期を迎える。この1年間にモーツァルトは爆発的な創作力を見せている。未完となった〈レクイエム〉や歌劇〈魔笛〉、クラリネット協奏曲等々。これらの傑作群と並んで、**歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉**は、レオポルト2世がボヘミア王としてプラハで戴冠式をとりおこなう際に上演される祝祭オペラとして作曲された。台本には戴冠式にふさわしく、統治者の寛恕^{かんじょ}を題材とした古くからあるメタステージの作が選ばれ、これをマッソーラが大幅に短縮して改作した。

依頼から9月上旬の戴冠式までは6週間ほどしかなく、しかも8月半ばになってようやく配役がモーツァルトに知らされたため、非常に短期間のうちに作曲の筆が進められた。戴冠式には間に合い、モーツァルト自身の指揮で上演された。

序曲は荘重で祝典的な性格を持ち、推進力にあふれている。“夢に見し花嫁姿”は第2幕で歌われるヴィテッリアのロンド。皇帝ティートの妃となることを望むヴィテッリアは、その望みがかなえられ

ないと知ると、自身に思いを寄せるセストに皇帝の暗殺をそそのかす。暗殺に失敗し、罪をかぶって死を覚悟するセストを目にして、ヴィテッリアは罪の告白を決意し、苦悩と恐れを技巧的な歌唱によって表現する。

歌劇〈イドメネオ〉は、ウィーン移住の転機を前にしたモーツァルト25歳の作品。1780年、新天地を求めて敢行したマンハイム・パリ旅行が失敗に終わり、故郷ザルツブルクで満たされることのない日々を送るモーツァルトのもとに、待望の新作オペラの作曲依頼が届く。依頼主はミュンヘンのバイエルン選帝侯カール・テオドール。報酬は十分とはいえなかったようだが、好機の到来にモーツァルトは渾身^{こんしん}の力をふりしぼって、この新作オペラに取り組んだ。ミュンヘンでの初演の後も、モーツァルトはこの作品に少なからず思い入れを持っていたようで、ウィーンに移り住んだ後に再演を試みている。

〈イドメネオ〉の舞台はトロイア戦争後のクレタ島。イドメネオ王とその息子である王子イダマンテ、トロイアの王女イリア、アルゴスの王女エレットラの間でくりひろげられる愛と苦悩が描かれる。終幕で、海神の託宣によりイリアとイダマンテが結ばれ歓喜にわくかたわら、イダマンテへの思いを遂げられなかったエレットラは、“**オレステとアイアスの苦しみ**を”で、絶望と怒りが渦巻い

て荒れ狂う心情を歌う。

ミュンヘンで〈イドメネオ〉を上演したモーツァルトは、すぐにはザルツブルクに帰郷せず、しばらくこの地に留まった。ウィーンを訪れていたザルツブルクの大神父コロレドは、モーツァルトにザルツブルクに帰らずに、ウィーンに赴くように命ずる。大神父はお抱え音楽家の腕前をウィーンで披露させようと考えたのである。しかし、モーツァルトはこれを機にかねてより対立していた大神父との亀裂を一層深め、ついに宮廷音楽家を辞職して、ウィーンに定住することになった。

交響曲第35番二長調〈ハフナー〉が書きあげられるのは、ウィーンに住んで2年目となる1782年のこと。モーツァルトはザルツブルクの父親から、名門ハフナー家の若い当主ジークムントの爵位授与を祝うために、新作交響曲の作曲を依頼される。多忙のモーツァルトは「お父さんのために犠牲を払いましょう。なるべく急いで、しかもよい作品を書きあげます」と返答している。しかし他の作品に時間をとられていたモーツァルトの筆はなかなか進まず、釈明の手紙とともに

に、まずは第1楽章、次は終楽章といったように、楽章ごとに父親に送られることになった。

作品の完成が祝宴に間に合ったかどうかは判然としないが、モーツァルトはその後ウィーンでの演奏会のために、この作品を再利用している。その際、モーツァルトはスコアにフルート2本とクラリネット2本を書き足して、木管楽器の編成に厚みを加えている。皇帝ヨーゼフ2世臨席のもとで開かれた公演は超満員となり、大成功を収めた。

第1楽章 アレグロ・コン・スピリト ヴァイオリンがいきなり2オクターヴにわたって跳躍するという、エネルギーあふれる主題で開始される。

第2楽章 アンダンテ 優美で穏やかな緩徐楽章。

第3楽章 メヌエット 堂々と力強いメヌエットの間に、典雅なトリオがはさまれる。

第4楽章 プレスト 父親への手紙によれば、「できるだけ速く演奏されなければなりません」。祝祭感にあふれた快活なフィナーレ。

楽器編成／【演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉】フルート2、ホルン2、弦五部、独唱ソプラノ 【演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉】フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱ソプラノ 【歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲】フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部 【歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”】フルート、オーボエ2、パセッティホルン、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱ソプラノ 【歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみ”】フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独唱ソプラノ 【交響曲第35番〈ハフナー〉】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

🎭 モーツァルト／演奏会用アリア〈あわれ、ここはいずこ〉K.369 歌詞対訳 🎭

Misera, dove son!
L'aure del Tebro son queste
ch'io respiro?
Per le strade m'aggirò
de Tebe e d'Argo?
O dalle greche sponde,
di tragedie feconde,
le domestiche furie
vennero a questi lidi,
della prole di Cadmo,
e degli Atridi?

Là d'un monarca ingiusto
l'ingrata crudeltà m'empie d'orrore:
d'un padre traditore
qua la colpa m'agghiaccia;
e lo sposo innocente
ho sempre in faccia.
Oh immagini funeste!
Oh memorie! Oh martiri!
Ed io parlo, infelice,
ed io respiro?
Ah no!...

Ah! non son io che parlo, (rip.)
e il barbaro dolore, (rip.)
che mi divide il core, (rip.)
che delirar, che delirar mi fa.
Ah! non son io,
ah, no son io che parlo, ecc.

Non cura il ciel tiranno
l'affanno in cui me vedo:
un fulmine gli chiedo,
e un fulmine non ha.
Ah! non son io, ecc.

ひどいこと、ここはどこでしょう！
私の吸うこの空気は
テーベレ川のものでしょうか
私の歩むこの道は
テーベとアルゴスのもののでしょうか
それとも悲劇に満ち満ちた
ギリシアの岸に通じるもののでしょうか
あの家族の怒りが
この堤まで届いたのでしょうか
カドモスの子の、そして
アトリダエの怒りが

そこでは不正な王の
非情な仕打ちに私は耐えかねた
ここにきては、裏切者の父に
私は身の凍る思いをした
何も知らぬ夫は
いつも私の前にいる
ああ、何という悲惨な光景
ああ、何という記憶、何という苦しみ
それでもこの不幸な私は語り
私は生きるのですか
いいえ、そうではない

今話しているのは私ではない
それは私の苦悩です
この心を引裂く苦悩です
私を混乱させる苦悩です
ああ、私ではない
今話しているのは私ではない……etc.

無情の天は、私の見た
地獄の光景を忘れさせてくれない
雷に打たれて死にたいと思っても
それも降ってはいくれない
ああ、私ではない……etc.

訳：石井宏

Prendi cura di sua sorte,
consolarla almen procura.
Vado, ah! lasso! addio,
addio per sempre.

Quest'affanno, questo passo
èterribile per me,
è terribile, terribile per me.
Resta, oh cara, resta, oh cara;
acerba morte mi separa,
oh Dio! da te,
mi separa, oh Dio! da te.
Prendi cura di sua sorte, ecc.
Ah! dov'è il tempio, dov'è l'ara?
Vieni, affretta la vendetta! ecc.
Vieni, vieni!
Questa vita così amara
più soffribile nonè, no,
più soffribile nonè.
Dov'è il tempio, dov'è l'ara?
ah dove? ah dove?
Vieni affretta la vendetta, ecc.
Oh cara, addio, addio per sempre!
Ah, questa vita così amara
più soffribile nonè, ecc

とどまってあの方を世話し
あの方をお慰めするのだ
私は行く、ああ、さようなら
永久にお別れです

このように苦しみ別れることは
私には耐え難い
耐え難いことだ
とどまれ、わが心よ
苦い死が、私をお前から
ああ、引き離すまで
お前から、ああ、引き離すまで
とどまってあの方を世話し……etc.
ああ、寺はどこ、祭壇はどこだ
きたれ速やかに、復讐よ
きたれ、きたれ
このように苦い人生には
もはや耐えられない
もはや耐えられない……etc.
寺はどこ、祭壇はどこだ
ああ、どこにあるのだ
きたれ速やかに、復讐よ
ああ、いとしい人よ、永遠（とわ）にさようなら
ああ、このように苦い人生には
もはや耐えられない

訳：石井宏

🎭 モーツァルト／歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉から“夢に見し花嫁姿”歌詞対訳 🎭

Non più di fiori vaghe catene
discenda Imene ad intrecciar.
Stretta fra barbare aspre ritorte
veggo la morte ver me avanzar.
Infelice! Qual orrore!
Ah di me che si dirà?
Chi vedesse il mio dolore,
pur avria di me pietà
Non più di fiori...

花の美しいかすがいを編もうと
結婚の女神が降り下ってくることはもうないのです
残忍で厳しい若枝の中を
厳しい死が私の方に進んでくのが見えます
不幸な女よ！ 何という怖れ！
ああ、私のことをみんな何と言うでしょう？
でも私の悲しみを見た人は、
私を憐れんでくれるでしょう
花の美しいかすがいを編もうと……

訳：海老沢敏

🎭 モーツァルト／歌劇〈イドメネオ〉から“オレステとアイアスの苦しみを”歌詞対訳 🎭

Oh smania! Oh furie! Oh disperata Elettra!...
Addio amor, addio speme! Ah il cor nel seno
già m'ardono l'Eumenidi spietate.
Misera, a che m'arresto?

Sarò in queste contrade della gioia
e trionfi spettatrice dolente? Vedrò Idamante alla
rivale in braccio, e dall'uno e dall'altra mostrarmi
a dito? Ah no; il germane Oreste ne' cupi abissi
io vùò seguir. Ombra infelice! lo spiro mio accogli,
or or compagna m'avrai là nell'inferno a
sempiterni guai, al pianto eterno.

ああ、狂いそうだ！ ああ、怒りに燃える！ ああ、絶
望したエレクトラよ！……
愛よ、さらば、さらば、希望よ！ ああ、胸の中では残
忍な復讐の女神たちが私の心をもう烈しく燃え立た
せている。あわれな女よ、なにをためらっているの？
私がこの国で、よろこびと勝利を悲しく眺めていなければ
ならないの？ イダマンテ様が恋仇の腕に抱かれ
るのを見るのだろうか？ そして二人して私を指す
のを？ いいや、けっして弟のオレステスにしたがっ
て、暗い深淵に入っていこう。不幸な亡霊よ！ 私
の魂を受け入れたまえ。すぐにもお前は地獄で私を
連れとするだろう。永遠の苦しみに、永劫の悲しみに

D' Oreste, d' Ajace
Ho in seno i tormenti,
D' Aletto la face
Già morte mi dà.
Squarciatemi il core,
Ceraste, serpenti,
O un ferro il dolore
In me finirà.

オレステスとアイアスの
苦しみを私は胸に秘めている
アレクトーの松明（たいまつ）は
すでに私に死をもたらし
私の心を引き裂いてくれ
つのへびよ、蛇よ、
おお、剣が
私の苦しみを終わらせるだろう

訳：海老沢敏

🎭 モーツァルト／演奏会用アリア〈うるわしい恋人よ、さようなら〉K.528 歌詞対訳 🎭

Bella mia fiamma, addio!
Non piacque al cielo di renderci felici.
Ecco reciso, prima d'esser compito,
quel purissimo nodo, che strinsero
fra lor gli animi nostri con il solo voler.
Vivi; cedi al destin, cedi al dovere.
Dalla giurata fede la mia morte t'assolve.
A più degno consorte, oh pene!
unita vivi più lieta e più felice vita.
Ricordati di me; ma non mai turbi
d'un infelice sposo la rara rimembranza
il tuo riposo.
Regina, io vado ad ubbidirti;
ah, tutto finisca il mio furor
col morir mio.
Cerere, Alfèo, diletta sposa, addio!

Resta, oh cara, oh cara;
acerba morte mi separa,
-oh Dio! da te, ecc

いとしい人よ、さようなら
二人は幸せになれない定めなのだ
結ばれる前に解ける
この純潔な結び目は、二人の心を
一つにつないでいたものだった
元気で……運命と義務とに従って
私が死ねば、あなたの愛の誓いから解かれる
もっと良い夫が見つかる、ああ！
もっと楽しく幸せな生活が待っている
私を思い出してくれ、しかしこの不幸な
恋人の思い出に
心悩まされてはいけない
女王よ、仰せのように私は去ります
ああ、この熱情が
死をもって終わらないものか
チェレーレ、アルフェオ、恋人よ、さようなら

とどまれ、わが心よ
苦い死が、私をお前から
—ああ、離すまで……etc.

第546回
定期演奏会

3.27 〈金〉

モーツァルト
歌劇〈劇場支配人〉序曲

作曲：1786年1～2月／初演：1786年2月7日、ウィーン、シェーンブルン宮殿／演奏時間：約5分

ドタバタ劇に与えられた、「折目正しい」序曲のかたち

1781年、故郷ザルツブルクから飛び出したヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）は、ウィーンという大都市に新天地を求める。宮廷などに奉職せずに活動する「フリーランス」の音楽家として、自作ピアノ協奏曲の定期演奏会などを主催し、その存在感を確実に増していた。

1786年2月、オーストリア領ネーデルランドの共同統治者がウィーンを訪問するのに合わせ、皇帝ヨーゼフ2世はシェーンブルン宮殿での祝祭で、イタリア風・ドイツ風による2種類のオペラの上演を企画。前者の作曲をアントニオ・サリエリに、後者をモーツァルトに命じた。モーツァルトは当時取り組んでいた歌劇〈フィガロの結婚〉の作曲を中断し、「序曲、2つのアリア、1曲の三重唱とヴォードヴィルから成る

音楽付き喜劇」を書き上げた。劇場支配人が劇団を結成し、役者や歌手を雇おうとするドタバタ劇（台本：ゴットフリート・シュテファニー）では、2人のソプラノが歌唱力を張り合い、それを仲裁するテノールとの三重唱では〈魔笛〉の夜の女王にも匹敵する超高音（3点F）が用いられる。

その一方で、序曲は、こうしたドタバタ劇とはうらはらに、折目正しい、短いながらも確固たる構成を有したソナタ形式で作曲されている。ハ長調（主調）による第1主題が3小節でひとつのフレーズを形作り、第2主題は定石通りト長調（属調）。そして、この二つの主題が展開部を経て、再現部ではどちらも主調たるハ長調に戻ってくる。その作曲技法はここからわずか2年で、交響曲第41番の複雑かつ完璧なソナタ形式へと成熟を重ねていく。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

作曲：1788年8月／初演：不明／演奏時間：約31分

晩年の作曲家がたどり着いた、対位法的書法の究極の姿

モーツァルトは交響曲第39～41番を1788年6月から8月にかけて作曲した。不思議なことに、いずれ劣らぬ名作揃いのこの3曲には、作曲の動機を示す決定的な証拠が残されていない。現在ではモーツァルトは3曲セットの交響曲集を出版するためにこの作品を作曲したのではないか、という説が有力となっている。1786～87年には、ヨーゼフ・ハイドンと弟ミハエルが3曲セットの交響曲を出版しており、モーツァルトも同じ出版社から同じ形態での出版をもちかけられたらしい。

〈ジュピター〉の名を冠するハ長調交響曲は、その愛称にふさわしく、**第1楽章**（アレグロ・ヴィヴァーチェ）だけをとってみても、その堂々たるソナタ形式には目を瞠らされる。緩徐楽章たる**第2楽章**（アンダンテ・カンタービレ）にもソナタ形式が用いられ、**第3楽章**（メヌエット／アレグレット）のトリオでは、第4楽章の第1主題が先取りされる。だが、やはりこの作品の白眉は**第4楽章**（モルト・アレグロ）であろう。第40番でもひっそりと試された、二つ以上の旋律を

対等に組み合わせるポリフォニックな音楽の手法が本格的に用いられており、その意味でも、それ以前と以後の交響曲を大きく隔てている。第1主題と第2主題こそハ長調（主調）、ト長調（属調）の枠組みが守られているものの、そのほかにも三つの副次主題が同じ程度の重みを持って扱われていることを見ても、楽曲全体の複雑さは増している。

再現部の第2主題がハ長調（主調）となるのは定石通りだが、その後のコーダ（終結部）では、第1主題と第2主題が同時に演奏されるだけでなく、その後には三つの副次主題も含んだ計五つの主題が同時に演奏され、ほとんどカオスに近いフィナーレを迎える。これがヘンデルやバッハを研究した末の、モーツァルト独自の対位法的書法であることは、すでに多くの言及がある。このコーダこそ、晩年（というにはあまりにも早すぎるが）のモーツァルトがたどり着いた、ソナタ形式に対する最終的な回答であった。

楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

R. シュトラウス 交響詩〈英雄の生涯〉 作品40

作曲:1898年/初演:1899年3月3日、フランクフルト・アム・マイン、指揮:リヒャルト・シュトラウス/演奏時間:約45分

「自我」を冷静に見つめた若き作曲家の、苦闘と絶望の記録

リヒャルト・シュトラウス(1864～1949)という人物が作り続けた音楽の理解には、「自画像」というキーワードが欠かせない。ベートーヴェン以降のロマン派の作曲家の多くは自我を作品の中に投影させたが、シュトラウスは自我を投影させた人物とみずから「重ね合わせる」ことはなかったのが、そのもっとも大きな違いである。シュトラウスは自己を客体化して見つめ、ときには突き放し、醜いところもそのまま描き出す。この自画像癖を「悪趣味」と貶す評論は初演当時から存在し、いまなお否定的に評価されることもあるが、シュトラウスは基本的にナルシズムとは無縁な芸術家であった。

〈英雄の生涯〉が音楽家としてのみずからの人生を題材として作曲されたことは有名だが、前年の1897年に作曲された〈ドン・キホーテ〉が対となる作品として構想されていたことはあまり知られていない。しかし、シュトラウス自身が〈ドン・キホーテ〉と〈英雄の生涯〉は一对の作品であり、前者を聴かないと後者を完全に理解することはできない、と発言している。快活な騎士アロンソ・キハノは、騎士道物語を読み過ぎて精神の

平衡を失い、みずから騎士「ドン・キホーテ」と名乗って冒険の旅に出る。このドン・キホーテが陥った精神の闇、さらには、さまざまな冒険の経験を糧に成長することはなく、同じような失敗を繰り返す主人公の姿は、変奏曲という形に仮託して表現され、作曲家の最大の共感を持って描かれた。

〈ドン・キホーテ〉では他者に仮託して表現されたみずからの想いは、〈英雄の生涯〉において、ベートーヴェン以来「英雄」を描く際に用いられる変ホ長調の勇壮なテーマで始まる「あるひとりの英雄」へと形を変える。途切れることなく演奏される六つの部分から成る本作においては、**第1部：英雄、第2部：英雄の敵、第3部：英雄の伴侶**が、それぞれソナタ形式における第1主題、スケルツォ的な移行部、第2主題を提示する箇所と位置づけられるだろう。英雄とその敵が戦う様子を描いた**第4部：戦場での英雄**が展開部、**第5部：英雄の業績、第6部：英雄の引退と完成**が、それぞれ再現部、結尾(コーダ)を成す、と解釈することは可能ではある。

本作を、〈ドン・キホーテ〉で描いた内容をさらに敷衍し、作曲家みずからの来

し方行く末に重ね合わせた作品、と捉えるならば、妻と手を携えて評論家と戦い、これまでに作曲した自作を回想し、物思いに耽る、という従来の標題的な聴き方にこだわっても、見えてくることは少ない。そもそも、この作品の構想時期は、ミュンヘン歌劇場で指揮者として一旗揚げようとするも、当時の劇場総支配人だった男爵カール・フォン・ペルファル(強力なアンチ・ワーグナー派だった)によって、それ以上の活躍を阻まれてしまった頃である。自分の足を引っ張ろうとする評論家もさることながら、若い音楽家という立場では決して超えることのできない大きな壁のような存在、組織の上司が目の前に立ちただかっている。どれだけ華々しい活躍を重ねようと、その壁を決して乗り越えることはで

きない自身もまたドン・キホーテではないのか。その終結部で、夫婦(夫＝ホルン、妻＝ヴァイオリン)が互いを慰め合う幕切れは、諦めの境地すら漂う、後味の悪いものとなった(管楽器によるファンファーレで終わる現在の幕切れは、後に改訂されたもの)。

かなり形の崩れたソナタ形式によって描かれる二つの旋律は、相争いながら互いを高めあって大団円に至るような、ベートーヴェン的な構成原理からは遠い。〈死と浄化〉の頃まではまだそれがかるうじて存在していたことを思えば、1890年代におけるシュトラウスの心境の変化はかなり大きい。この苦境を踏み越え、整理をつけることによって、シュトラウスは20世紀初頭のオペラでの成功を掴み取った。

楽器編成/フルート3、ピッコロ、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット5、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、タムタム)、ハープ2、弦五部

XX 〈英雄の生涯〉 ソロ・ヴァイオリン

長原 幸太 Kota Nagahara (読響コンサートマスター)



広島県呉市生まれ。東京藝術大学、ジュリアード音楽院に学ぶ。1994年、ヴィエニャフスキ国際コンクール(17歳以下の部)第3位。98年、日本音楽コンクール最年少優勝。小澤征爾、岩城宏之、秋山和慶、ゲルハルト・ボッセらと共演。室内楽やオーケストラの客演コンサートマスターとしても活躍し、アルゲリッチ国際音楽祭、宮崎国際音楽祭等にも出演。2004年、大阪フィル首席客演コンサートマスターに就任、06年から12年まで首席コンサートマスターを務めた。14年10月、読響コンサートマスターに就任。